# 資料渉猟余話 その11

## 「匿名組合猶興社」について

嶋　不濁

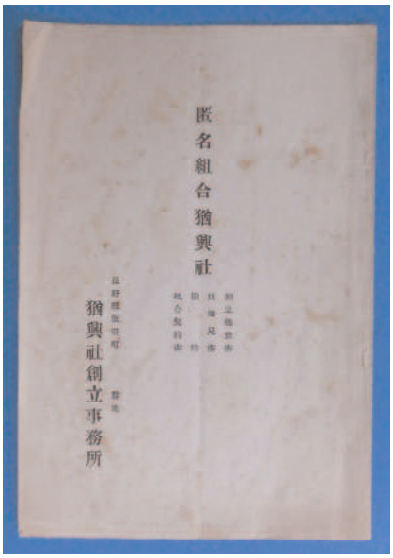
飯伊の詩吟の草分丸山岳峰の『吟道五十周年の歩み』に「龍江に中原謹司という人がいた。後に、県会議員、衆議員議員を歴任され、下伊那の在郷軍人会分会長もつとめた方だが、この人が昭和四年に飯田市江戸町の裁判所東北側角に猶興社（ゆうこうしゃ）を設立」という一文がある。丸山さんたちは、昭和8年頃から月2回、この猶興社で矢高行路（束（つかね））さんを会長に下伊那興国朗吟会の詩吟研究会を開いていた。

また料亭八ッ橋三代目女将の御主人高坂正治さんの『なつかしき飯田　市井巷話拾遺』にも「江戸町の正永寺上、現在の裁判所の下通り角に「猶興社」と呼称する木造三階建の建物があった。あの地域では珍しく大きな建物で幼少の頃に満州国移民（開拓団）の業務をする所だと仄聞していたが定かでない」という一文があり、地方事務所へ勤務していた高坂さんは、猶興社の一室で会議の会場作りに行った記憶があると書いている。昭和10年代に木造三階建ての建築物は珍しかったに違いない。さらに天龍峡の今村真直さん（84歳）も、父親良夫さんの使いで川路から自転車で猶興社に行って、事務にいた小林洋吉さんから駄賃にお菓子をもらった記憶があると話してくれた。

この猶興社とはどんな機関なんだろうと思っていたところ、数年前になるが、南信州地域資料センター「捨てないで!!」の活動で猶興社の創立趣意書や規約などの書かれた菊判14頁の印刷物が見つかった。そこには「責任者中原謹司」や森本洲平他22人の下伊那の有力者が「賛成人」として名前を連ね、「信陽の王国下伊那は古代より色々な方面に於て中央を動かす様な地方文化の発祥地として重用視されてきました」に始まる当地4紙目の新聞創刊の志とともに、「祖国興亡の岐路に臨んで文章奉國の士卒」たる旨の設立趣意の陳述があった。具体的には勃興するリベラリズムの広報に危機感を感じた旧保守勢力の印刷・広報部門の役割を担っていたようだ。

大正中期から昭和10年頃までの飯田下伊那は印刷文化が一気に花開いた感がある。『伊那公論』（T6）、『天龍口論』（T8）『組合製糸研究』（T9・郷土誌『伊那』前身）、大正10年には下伊那の大正リベラリズムを代表する短歌雑誌『夕樺』、自由青年連盟の機関誌『第一線』（T12）、『政治と青年』（T13）、『信濃大衆新聞』（T15）他、『信濃産業新報』『女人藝術』『獅子吼』『深山政友』『飯田ニュース』『信濃国民新聞』など様々な雑誌や新聞が創刊された。これらのメディアはいずれも短命に終わるが、こうした民衆思想の台頭を危惧する人々もいたのである。

その中に、中原謹司はともかく、小林洋吉も勤めていたなんていう話はまさに伊那谷らしい。



猶興社趣意書